

床の間コーナーギャラリートーク

田島勝爾の生涯と田島精神

～みかん作りは人作りから～

日時 平成30年9月9日
 場所 エイブル3階 研修室
 講師 高橋 研一
 (鹿島市民図書館 学芸員)

〈鹿島市明治維新 150 年記念事業と田島勝爾〉

今年、明治維新 150 年にあたり、鹿島市でも昨年度から明治維新 150 年記念事業に取り組んでいます。その事業のひとつとして、田島勝爾顕彰事業を行い、記念誌『田島勝爾の生涯と田島精神』を執筆・刊行しました。現在、床の間コーナーにおいて、「地域を育てた鹿島人 田澤義鋪と田島勝爾」展を行っており、本日は関連事業として、田島先生の生涯、そして田島先生が伝えようとしたものを、お話していきたいと思っております。



▲講師 高橋 研一

佐賀県内で行われている明治維新の顕彰事業は、文武で分けると、武の部分、欧米列強が東アジアに進出して来る、その欧米の侵略からこの国を守るために、どういう科学技術や軍事技術が必要なのか、そこに特化して、明治維新が捉えられます。そして、その行き着いた先には日中戦争、太平洋戦争があります。苦心の末、ようやく手に入れた強大な軍事力や優れた技術にむしろ振り回される状況が最終的には生じたのです。優れた軍事技術や科学技術を持った場合、それをしっかりとコントロールして、抑制的に使いながら、周囲と共存する考えを持った国民がなにより必要です。しかし、明治維新以降の教育は国家のために命を差し出す臣民を育てる方向に向かいます。明治維新は結果的に文と武のバランスが武に大きく偏ってしまいました。そこには文に裏付けられた武などなく、ただ武に引きずり廻される文の姿があったのです。文と武のバランスは何も過去の問題ではありません。戦前の武（軍事）にかわる存在として、現代にはクローンなどの人類のあり方に大きな影響を与える科学技術があります。最新の技術と人類が向き合っていくうえで、それをしっかりと使いこなせる心を持った人間を育てるためにはどうしたらいいのかは変わらない課題だと思います。

では、どういう武の対比となる文があれば、明治維新が日本あるいは世界にとってより良いものになったかを考えた時に、一人ひとりが自立して自分の頭で考えて、自分の言葉

で語り、責任を持って動く国民が必要だったのだと思います。鹿島の中で、そうした生き方を実践したのが田島勝爾先生なのです。

《明治維新と農業》

田島先生が活躍した分野はみかんをはじめとする果樹、より大きな括りでは農業になります。

それでは、明治維新の前後で農家を取り巻く環境はどのように変化したのでしょうか。江戸時代の農家は藩に納めるための米を作ることが大きな役割でした。自分たちが豊かな生活をする、あるいは土地にあった作物を作るのではなく、藩に納めるための年貢として、米・麦、あるいは蘆などを作ることが日々の営みだったのです。

それが明治維新によって、藩がなくなると、自分たちが生きている場所で、より豊かな生活ができるための作物を選んで、工夫して作ることができるようになります。これが明治維新の農業に与えた大きな影響だと思います。田島先生だけでなく、各地域でさまざまな作物を植えて、今の農業に繋がる礎を築いた方々はたくさんいるのだと思います。ただそうした方々の記憶は、記録として残りにくい。だから、その記憶を持っている人々が亡くなると、つぎつぎと途絶えてしまってきたのです。

たとえば、鹿島の場合、江戸時代以来、有明海沿岸の干拓が進みました。その干拓地に入植した人々はこういった作物が合うのかを、相当な命を犠牲にしながらも選び抜いてきました。その尊い犠牲の上に、現在の北鹿島や重ノ木の干拓地での人々の生活があります。しかし、そういったことには全く関心を向けられずに、直朝公が干拓地を作り、豊かになったとばかり語られるだけです。その土地で真摯に生きた農民の姿はこれまで描かれてきませんでした。

田島先生もあと 50 年も経てば、あるいは忘れ去られてしまっていたかもしれません。しかし、田島先生の功績を伝えたいと願う人達、そして田島先生から贈られた書を大切に守っている人達のお陰で、地域の先駆者の姿を 1 冊の本にまとめることができました。これを契機に、鹿島でさまざまな分野での先駆者が掘り起こされることが期待されます。

《田島勝爾の生涯》

田島先生は明治 23 年（1890）12 月、能古見地区の南川に生まれました。南川区は江戸時代、鹿島藩領ではなく、佐賀藩士深江家の所領だった地域です。

比較的裕福な家だったようですが、お父さんが日露戦争で負傷し、それ以来、家が傾きます。それで、田島先生は幼い頃からわら草履などを作り、それを売って自分の学費を稼いでいました。能込尋常小学校を卒業して、鹿島の高等小学校に進学しています。もともと学校の先生になりたかったと語



▲田島勝爾

っており、相当な学力があったようです。けれども、家の事情で、さらなる進学は難しく、

教員になる道を諦めています。

そこで、アメリカにいる親戚を頼って、アメリカに渡ろうと考えます。昼間は農作業にいそしみ、夜は英和辞典を読んで、独学で英語を習得しましたが、いざ渡ろうとした時に、アメリカで移民排斥運動が盛んになり、アメリカに渡る人たちの数が大幅に制限されてしまいます。そのため、田島先生も渡米を断念せざるを得ませんでした。

教員、渡米の道を相次いで断たれた田島先生は、明治 45 年、21 歳の時、朝鮮半島に渡っていた恩師を頼って、三菱が朝鮮半島に作っていた東山農場という農事試験場に行きます。この恩師が誰かはわからないのですが、大正 2 年（1913）の鹿島鍋島家の記録に、重ノ木出身で東山農場に渡っていた森田須磨吉が皇室に献上する予定の葡萄を鍋島直彬に献上した記述があります。森田須磨吉以外にも鹿島から東山農場に渡っていた人がいる可能性もあり、断定はできませんが、森田須磨吉が田島の恩師だった可能性がある人物のひとりといえます。

田島先生は、米作の研究のために東山農場に行きますが、次第に果樹の方に関心を持ち、ぶどう・みかん・なしなどの研究に携わります。7 年程、朝鮮半島に滞在した田島先生は、「朝鮮半島はとても冬が厳しい、日本では冬の間には裏作としてできることも、朝鮮半島ではできない。それなら、日本に帰った方が朝鮮半島よりも 2 倍いろんなものが作れて、2 倍豊かになれる」と考え、大正 7 年に帰国します。

鹿島に帰ってきたときには、実家から資金的な援助をもらえるような状況ではなかったため、入植する土地を探してまわり、久保山の西谷に入植することに決めました。西谷で土地を借用して、果樹の栽培を始めます。この時、古畳 2 枚と茶碗 1 個だけを持って、たった一人で山の上に登り、開墾を始めました。そして、自分で 2 畳敷きの掘立小屋を作って、生活していました。現在は、開墾され、みかんが整然と植えられています。もともとは一面が松林と雑木林に覆われた土地でした。田島先生がたった一人で入植して、切り拓いていったのです。

石や木の根っこを除けて、更地にした後に、先生はいきなりみかんを栽培したわけではなくて、びわ・みかん・なし・ももなど、さまざまな果樹を植えて、この土地には何が合うかを、日々記録をつけて、検証しました。そして、最終的に、なしとみかんに絞っています。今ではみかんの先生というイメージが強いのですが、戦前の記録だと、なしの優れた栽培者として知られています。大正 11 年には野中エイさんと再婚し、その後、二人三脚で、果樹の栽培と普及に取り組んでいきます。

古枝あるいは久保山は、山を背にして平地に田んぼが広がっています。平地の条件の良い田んぼを有力地主が経営して、その周りを小作人が耕作して、細々と暮らしている構造



▲田島果樹園跡に建つ田島勝爾の石像

でした。これは江戸時代から続く構造で、明治維新後も変化することはありませんでした。そこに、田島先生が新しく果樹をもたらし、山間部や斜面部を開墾して、収益を上げていきます。これによって地域のあり方は大きく変わっていき、次第に果樹は米にならぶ主要産業へと成長していきます。佐賀県も果樹栽培の先進的な取り組みをする田島先生を評価し、大正 15 年に田島果樹園を模範指導園に指定します。米と繭によって生計をたてていた農村社会を果樹によって変えていく先駆者として、この頃から高い評価を受けるようになっていきます。

先生が常に考えていたのは、やるからには人並み以上の収益をあげなければならない。そこで最初に取り組んだのがいちごの栽培です。当時、いちごは高級品で、人口が多い鹿島町で高く売れるはずだと考えます。田島先生の思惑はあたり、いちごは高く売れ、その収益で、借用していた果樹園を買取ることができました。いちごはあくまでも最初の資金集めで、その後はみかんやなしによって、果樹園を経営していきます。

こうした取り組みをしている最中、田島先生のもとを訪れたのが田澤義鋪先生です。昭和 2 年（1927）に鹿島鍋島家の菩提寺である普明寺で講習会があった時、田澤先生は裏山にあった田島農園を訪れています。田澤先生は田島先生の生き方に非常に感激をして、田島先生の生き方を全国の青年の模範として知らしめなければならないと考え、「天地の中にわれ一人あり」という文章を書いています。「若い人達はすぐ付和雷同し、誰かが言ったらそれにくっついて動いて、自主性や自立性がない。それに対して、田島勝爾はシベリアの奥地に一人で放り出されても、そこで自分で考えて工夫して生きていく力を持っている。こういった人間にならなければならない」として、田澤先生は田島先生を全国に紹介したのです。

田島先生は苦心の末、果樹園を中心とした家の経営を軌道に乗せることに成功しました。しかし、田島先生には成し遂げた境地と収益を独占する考えはなく、周りに栽培を呼びかけて、その普及に取り組めます。最初に働きかけたのが地元久保山の方々です。それに応じた久保山の人達が九人仲間と呼ばれています。昭和 10 年頃から、皆でお金を出し合って開墾し、一人 2 反ずつ分配して、共同みかん園を造成しました。昭和 12 年には山田温州みかんを植えて、共同みかん園が完成します。

現在、田澤義鋪先生の日記を史料集として編纂している最中ですが、田澤先生の日記の中に、共同みかん園を作っているときに、田島先生が田澤先生に静岡からみかんの苗木を取り寄せたいと相談している記述がありました。田澤先生は静岡の安倍郡長になったことがあり、静岡に豊富な人脈を持っていました。日記にはその後の記載がないため、はっきりしませんが、共同みかん園に植えられたみかんは田澤先生が静岡から取り寄せて田島先生の渡したもので



▲田島先生頌徳碑

ある可能性があります。

共同みかん園が完成すると、九人仲間は田島先生に感謝の意を表すため、昭和 16 年に「田島先生頌徳碑」を建設します。頌徳碑の碑文は久保山柑橘組合員一同、すなわち九人仲間によって記されています。この碑文が田島先生について書かれた最も古い貴重な文章です。非常に研究心に富み、社会公共のためには一身を顧みない気概ありという先生の人柄が書かれています。そして 30 歳の時に、久保山に果樹園を創業して、それ以来 20 年間、みかんの栽培の研究に全力を尽して、その卓越した業績は世間の人々から高く評価されていると書かれています。九人仲間が荒地を開墾して、みかんを新しく植えようとする時、先生は上手くいかないかと心配し、九人仲間に参加して、土地、機具や薬剤、そして苗木の購入などに多大な私費を投じます。これによって、立派な共同みかん園が完成したと書かれています。

この後、田島先生の活動は久保山を越えて広がっていきます。これを時系列で追っていくと、最初に出てくるのは多良との関わりです。昭和 9 年に多良村の吉田好雄さんが、なしの栽培を学ぶために田島先生のもとに来ていました。田島先生の家で、なしのための土地を買って、なしを栽培していました。戦争に動員されたため、一旦そこを処分します。終戦後、吉田さんを中心に多くの多良の方が田島先生にみかんの栽培を学び、多良村果実農業協同組合の設立につながっていきます。

古枝地区で最初にみかん栽培に取り組んだのは中尾区です。昭和 18 年頃から森岩吉さんを中心に、みかんの栽培が始まっています。田島先生が古枝地区にみかん栽培を普及させていく上で、重要な役割を果たしたのが祐徳稲荷神社です。どうも田島先生の依頼を受けた祐徳稲荷神社がみかんの苗木を入手して、祐徳稲荷神社に納めるためのみかん園を作っていたようです。そして、そのみかんの一部を神社に納めた後は、農家の収益とする形で、古枝地区にみかんを作る場所が徐々に増えていったのではないかと考えています。その名残として、現在でも祐徳稲荷神社のお火たきの際には、みかんの奉納が行われています。そして、戦争が終わると、鮎越区や上古枝区でも、田島先生の指導のもと、みかん栽培が始まります。

みかん栽培に取り組み始めた地域では、栽培のマニュアルがあるわけではないし、現在のように県の試験場が指導してくれるわけでもないので、第一人者である田島先生に指導を仰ぎました。田島先生は指導を乞う人達を自宅に呼びつけるのではなく、自身が出向き、その地域の中心となる家で、みかん常会を開きました。その中で、田島先生を囲み、栽培者が質問し、田島先生がそれに真摯に答えていたといわれています。このみかん常会に関する資料が残されていたらいいのですが、口頭での問答がほとんどだったようで、みかん常会の具体的な雰囲気伝える資料は見つかっていません。

みかん栽培の輪が広がってくると、今度はみかん農家をまとめていくことが必要になってきます。田島先生は当初から組織化に関わっています。昭和 7 年には藤津郡園芸組合を結成し、組合長になります。米を中心とした農会とは別に、果樹だけの組織を結成し、い

ろんな取り組みをする先陣に田島先生は立っていました。戦後になると、全県規模での組織が結成され、田島先生も果樹研究同志会や園芸農業協同組合の設立に尽力して、副会長、あるいは会長として、佐賀県全体の果樹生産農家の組織化に尽力しています。こういった活動を積み重ねていったことによって、「みかんの先生」としてのイメージが皆さんの脳裡に強く残っていると思います。

田島勝爾が先生と慕われ続けているのは、自分の目で観察して、自分の頭で生み出して、自分が身につけた技能を独占することなく、みかんの栽培を志す人に惜しみなく与え続けたからです。そして、みかんに関わる共同作業をすることによって、新しい地域の絆を創り出して行った、それも先生の大きな功績です。また、あくまで一生産者にとどまりながらも、栽培・販売・加工などあらゆる分野に目を配って、みかん農家が経営体として成り立っていくための工夫をずっと続けてきました。

こうした功績は国からも称えられ、昭和 30 年に黄綬褒章を授与されています。鹿島のみかん農家も、田島先生のお蔭で生活できるようになったとの感謝を示し、田島先生の功績を後世に伝えるため、末光のみかん選果場（現在のララベル）の前に石像を建てました。

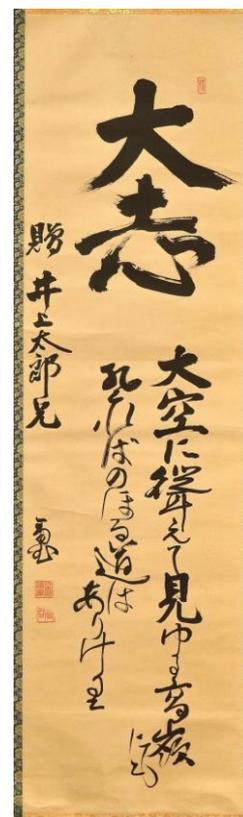
田島先生は昭和 63 年に 97 歳で亡くなりました。その間、昭和 40 年代にみかんの価格が暴落し、みかん農家の生計も一変してしまいます。田島先生の目の前では、自分が地域の人々を巻き込んで取り組んできたみかん栽培が急激に衰退に向かう状況が展開されていました。そのため、田島先生の晩年については、まだまだ語られていない部分が多く、今後の課題として残っています。

《書が伝える田島勝爾の信念》

田島先生には回想記や日記などがなく、これまで田島先生の信念や内面を知ることは困難でした。しかし、ゆかりのみかん農家を廻ると、田島先生から贈られた書が大切に飾られていました。この書はそれぞれの家の求めに応じて、その家のために自分で言葉を選び抜いて書いたもので、非常に含蓄と迫力のある書になっています。こうした田島先生が贈った書を見ていくと、田島先生が伝えようとした言葉、言い換えると田島精神ともいべきものが浮かび上がってきます。

最初に紹介するのは「大志」と大きく書き、その下に明治天皇の和歌を書いた書です。和歌の大意は、大空に聳えているように見える高い山でも、その山に登ろうとすれば、必ず登る道はあるということです。みかん栽培に取り組み始めた苦しい時期だからこそ、大きな志を持って、一生懸命努力すれば必ず道は開けるのだと激励するために贈ったのです。

大志を抱くと、その次は志に向かって努力しなさいということで、「努力」という大きな文字の下に、明治天皇の和歌を書いています。



和歌の大意は、軒先に雨うけとして置いてある石に、わずかな水滴が長年にわたって穴を開けていく、だからどんなに難しいことでも、そこに向ってひたむきに努力しなさいと、そうしたことを田島先生は書で訴えて贈っています。

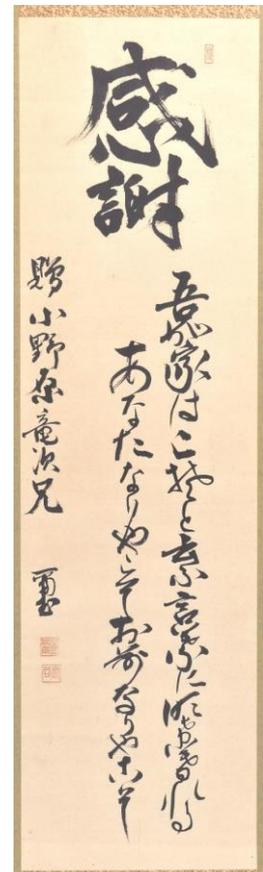
大志を抱き、そこに向かって努力して忍耐するのは、心を刺々しい方に向かわせそうですが、つぎに紹介する田島先生の書には、「誠心」という大きな文字の下に、これも明治天皇の和歌が書かれています。毎日昇ってくる朝日のように、いつも爽やかな心でいなさいと、追い詰められていては駄目ですよ、常に爽やかな心で周りの人にやさしく接しながら、一緒に生きていきなさいというのが、この言葉に込められています。

周囲への感謝と協調を説いた田島先生がもっとも大切に考えていたのが夫婦関係です。それは、田島先生が自分の果樹園と家庭は妻エイさんあってだと考えていたからです。自分は昼間の作業が終わると、夜は提灯を持って、鮎越や中尾にみかんの指導に行く、その間、エイさんは翌日に必要な作業の準備を家ですっとしてくれる、そして先生が帰ってくるまでにお風呂を沸かして待っていてくれました。そして先生が寝ると、ランプを持って、みかんにつく害虫を退治してまわる生活をしていたと聞いています。夫婦が一对となって、田島勝爾がみかんの先生として慕われるだけの働きができたのです。だからこそ田島先生は、みかん農家の経営が成り立っていくためには、夫婦が強く結びつき、家を支えていかなければならないと考えていたのです。

そのことをよく物語るのが、上古枝のみかん農家に贈った「感謝」という書です。「感謝」という大きな文字の下に、あなたのおかげでこの家があるのよ、いやお前のおかげでこの家があるんだよ、こうしたお互いに感謝しあう気持ちを持ちながら、一緒にいろんな困難が待ち受けているみかんの生産に取り組んでいきなさいという意味が書かれています。

また、田島先生が明治天皇の和歌と並んで、よく書いているのが高等小学校の修身の授業で学んだ格言です。田島先生は修身の授業で先生が教えてくれた言葉を、自分の戒めとして身にしみ込ませており、それを何かの折にはみかん農家にも書として贈っています。

そのひとつが「反省」という文字が書かれた書です。その下には「上見れば及ばぬ事ぞ多かりし、下見て暮らせ、己が心に」と書かれています。大きな志を抱いても、あまりにも雲をつかむようなことばかり言っても駄目で、しっかりと自分の足元をみて、自分の身の丈にあった分だけ進んでいきなさい、そういうことを訴えるために、この書を贈ったのだと思います。先生がこうした書を贈る背景には、そのみかん農家で何か問題が起こっていたのでしようが、先生はそれぞれのみかん農家のために、これまで自分の指針となった言葉、戒めとなってきた言葉を、その人のためにだけ、自分の中から出して贈っていたのだと思います。



そうした先生の生き方が集約されているのが「敬天人愛」と書いた書です。人として生きていくからには、自分の目



の前にある土・水・風、そうした自然に感謝する、そして周りの人たちに感謝の気持を忘れずに一緒に生きていきなさい。これが、本当にシンプルだけれども、田島先生が実践し、一番伝えたかった言葉だと思います。

田島先生は、誰も頼るべきものがない生き方をしています。だから、自分の目でよく見て、自分の頭でよく考えて、自分が率先して動く、これしかない生き方をしています。「まず何をしたいのかをしっかりと見定め、それをするために何が必要かを、自分の目で観察して、自分の頭で考える。そして限りある資金の中で、創意工夫して成し遂げていく。動き出したからには簡単に諦めないで、最後まで率先してしっかりとやりぬく。その際、自分だけがよければ良いのではなくて、周りの方に感謝して、一緒に生きていきなさい。」こうしたことこそ、田島先生が身をもって示し続けた生き方、すなわち田島精神なのです。

今回の講演の副題を「みかん作りは人作りから」としましたが、ここまで紹介してきたように、田島先生が示した生き方と伝えた言葉は、みかん農家である以前に、人としてのあり方に深く関わっています。それは田島先生が一貫して自然と社会の中で生きていく人の心をどう育てていくのかを考え、行動してきたからです。現在でも顕彰されてやまない田澤精神と並んで、自立と協調を重んじた田島精神は私たちがもう一度見直すべき価値がある鹿島の非常に優れた思想と生き方なのではないでしょうか。

今回の講演では、明治維新後の山間部での新しい動きとその担い手に注目しましたが、鹿島の重要な自然として、眼前に広がる有明海があります。北鹿島の村田楽太郎は「牡蛎養殖事績」などを記し、有明海でのカキやアサリなどの養殖に乗り出します。田島先生を山の先駆者だとすれば、村田楽太郎をはじめとする海の先駆者達も無数にいたのです。

明治維新を政治的なもの、あるいは中央だけのものとみってしまうと、明治維新が今につながっている新しい生活を作り出してきた部分に目が行き届かなくなってしまう。だからこそ、地域の生活・生業の変化とその意義について、今の私たちが知っている記憶をしっかりと体系的にまとめ、明治維新200年に向けての貴重な種として残していかなければなりません。



▲ギャラリートークの様子